

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.9

中秋の名月も終わり、梅の橋から観音町を抜け、向山から臨む白山の頂が白く化粧をし始めた頃でござったかのお・・・。

今年に入り何個目かの台風が近づいておると数日前から NHK のお天気コーナーで南さんが注意喚起しておりましたな。

なんでも温暖化の影響か、近年の台風はどんどん強く、どんどん大きくなっているそう。

市内でも台風の上陸に備え、ガラス窓や壁の補強、植木鉢などの避難に余念のない方々が多くなっているそうで。

今日、夕方の南さんのお話では、940hPa（ヘクトパスカル）前後で最大瞬間風速 60m の猛烈な勢力を維持したまま日本海を北上する恐れがあるそうじゃ。

940hPa に 60m じゃぞ。



それにしてもご助の奴、遅いのう。母屋と番小屋の窓補強にとガムテープを
買いに行かせたのがお昼前。それが夕方になっても帰ってこんのじゃ。

薄暗くなっては外での作業が出来なくなるではないか。憤懣^{ふんまん}やるかたなく
(意：とにかく腹立たしくてどうしようもないさま) 番小屋から出て、ふと母
屋の方を見ると・・・

「きゃー、ぼすけ、スパイダーマンじゃ。」

「姫様。姫様はおなごですからスパイダーウーマンですじゃ。」

「きゃあ、きゃあ、ぼすけもっと高くじゃ。」

「心得ましてござる。」

全身にガムテープを巻いた姫様とご助が母屋の壁にへばりついておったのでござる。



「た、楽しそうでござるな。」拙者が震える声で姫様に声掛けいたしますと

「あっ、ちえん。おもちろいぞ、ちえんも登ってきやれ。」と姫様のご返事。

見ればご助に買いに行かせたガムテープは、全て使い切られ、かろうじて1個のガムテープから短い切れ端が延び、夕刻を迎えて段々と強くなってきた東の風にはためいておった。

「さればで・・・」姫様の命とあらばと仕方なし、自身を納得させると拙者は残ったテープを鎧に巻き、お屋敷の壁を登り始めたのでござる。

「ちゅごい、ちゅごい、ちえんは速いな。負けるなぼすけ、^{ひさし}庇までじゃ。勝った方に金一両ぢゃ。」とべんだい（意：正月飾り）から引きちぎった小判をひけらかしたのじゃ。

と、途端に突風が吹き、あおられた小判が姫様の手から ヒラリっ と宙に舞ったのじゃ。

「あーっ」と、姫様が叫ばれるのと同時に、

「しめたっ」と、叫んだご助は、器用に体に巻き付いたガムテープを剥がすと、飛び去る小判目掛けてダイブしおったのじゃ。



「ふふあふあふあつ、馬鹿め。小判は庇まで先に登った勝者の物。ですな姫様？」

と、確認する拙者に応える声は無く、

「きゃーっ、ぼすけ。すきゃいボードじゃ。」と小判に乗ったご助を追いかけて

姫様が駆け出し、またしても拙者だけが取り残されたのじゃ。(※Vol7参照)



永い静寂のあと、我に戻った拙者は速く降り、姫様の後を追わねばと、ガムテープを剥がそうとすれども姫やご助の装束と違い、拙者の鋼の鎧からガムテープは容易に剥がれぬ。

何とかせねばと身をよじればよじるほど、ガムテープは拙者の鎧に絡まり、

気が付けば隣で柿木からぶら下がる蓑虫のように……。さらに先刻からの強風
に拙者の体は秋風に舞う木の葉のようになっておったのじゃ。

このままではいずれ遙か眼下に広がる母屋の庭先に叩き落されるに違いない。
覚悟を決めた拙者は鎧の胴紐を緩めると、 スポンツ と、胴鎧すり抜けの術
を用い、奥方様が閉め忘れておった賄いどころの窓を目掛け飛び移ったのじゃ。

白井家の健三殿を彷彿させる華麗な着地……。の筈じゃったが、サッシの枠に
けつまずき、拙者の体は再び宙を舞ったのじゃ。

拙者の周りの全ての動きがスローモーションのように流れ……。やがて、姫
様やご助との日常が懐かしく思い出され……。走馬灯とはまさにこのことを言
うのじゃなあ……。

などと感慨に耽っておった所へ、突如眼前に一条の紐が……。地獄でカン
ダタが見た蜘蛛の糸のように垂れ下がっておった。

これぞ天の助けとばかり、拙者はその紐にしがみついたのでござるが……。

途端に、

「ピーツ、ピーツ、ピーツ。火事です。火事です。ピーツ、ピーツ・・・。」

との大音響が家中に鳴り響いたのでござる。



「よ、夜討ちか!？」と拙者は聞いたことのない大音響に狼狽しながら、鎧は窓の外、この情けない姿を他家の郎党に見られては末代までの恥。

拙者のお役目もこれまでか・・・と、改易の覚悟を決めた刹那、携帯電話を持った奥方様が賄いどころに入って来られたのじゃ。

「あっ! いけない! お鍋の火を消し忘れていたわ。」奥方様はそう叫ぶとガス

コンロを消しながら、



「この報知器って敏感なのねえ、火事にならなくて助かったわ。長電話は駄目ね、お母さんも気を付けなさいよ。報知器付けた？」などと電話に向かって話されておった。

なんのことが判らぬまま、拙者は奥方様の話しぶりに夜討ちではないと安心し、逃げるように番小屋へと帰ったのでござる。

番小屋では屋敷の騒ぎを聞いたご助が先に帰っていて、拙者の姿をみるや、

「旦那様、さすがです。あの状況でお屋敷の大事を察知し、危険を冒して報

知器を鳴らし、奥方様にお知らせするなど。本当に旦那様はご助の誇りにござりまする。こちらは姫様からのご褒美にござります。」と、小判を拙者に差し出したのでござりまする。

「う？、うむ・・支援たる者、と、当然ではないか。」と戸惑いながら答え、

「ご助がスカイボードで得た小判じゃ、ご助が貰っておけ。」と言ったのじゃが、

勿論本心ではなく

『いやいや旦那様のご褒美ですから。』と重ねて言ってくれると思ったのじゃ

が・・・。

ご助めは、「しかれば。」と、そうそうに懐にしまいおって。

「あ・・そ、そうであるか・・さすがご助じゃ。」と呆れておりますと、

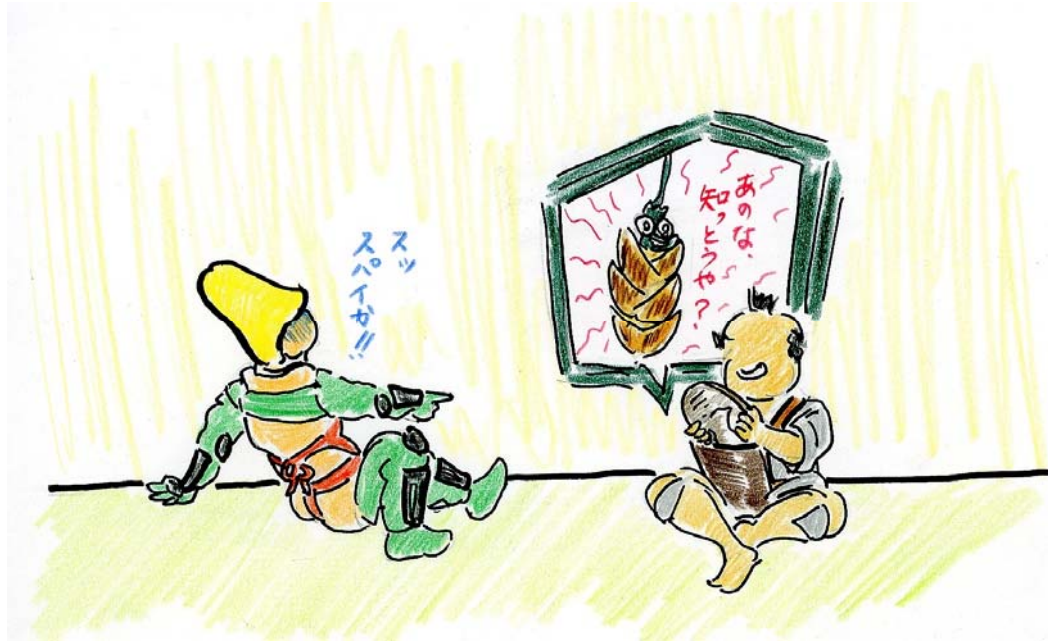
「ねえねえ旦那さま。私、以前から柿木のミノさんと懇意にしておりますね。」

と、ご助が言い出しましてな。

「柿の木の・・ミノ殿？」

「へえ、ミノさんが旦那様は体を張って危険を知らせた訳じゃないと、変なことを言うんでさ。」

「だ、誰じゃミノ殿とは！？・・あっ、ミイ、ミイ、ミイ、蓑虫か！！？」



「旦那様。その慌てぶりだとミノさんの言っていたことは本当ですな？」と言
いよるご助に拙者は、

「だ、黙れ。いや、黙っている。いや、誰にも喋るではないぞ。」ときつく申し
渡したのじゃが、

「へい。ご相談には乗りますぜ。」とご助が右手の親指と人差し指で輪を作るに
至り、堪忍袋の緒が切れましてな。

「この馬鹿者目が！ ガムテープを無駄にしたばかりかそのような下品な振る
舞い。もう許せぬ。」と拙者は立ち上がったのじゃ。

その時になって拙者は番小屋の窓という窓に、母屋の窓という窓にガムテー
プが貼られていることに気がついたのでござる。

「だ、旦那様のお叱りはごもってもです。此度は姫様のスパイダーマンごっこに付き合わされ、大事なお役目に穴をあけてしまいました。お許し下さいませ。」

と頭を下げるご助に

「・・・ガムテープはお主が貼ったのか？」と聞けば

「へい。」と答えるご助に

「かわいい奴よの。本件の不祥事、全て許してつかわす。」と答えた拙者は^{どうまき}胴巻

(意：さいふ) から一朱銀を取り出し、褒美としてご助に与えたのじゃった。

この後起きる惨劇も知らずに・・・じゃ。(つづく)

